

## W-3-3 動的音韻解釈からみた南琉球宮古諸方言の三型アクセント体系

新田 哲夫（金沢大学名誉教授）

### 1. はじめに

宮古八重山諸方言のアクセント研究の近年の発展は目覚ましく、平山輝男他 (1967) 等の昭和時代の先駆的な成果の塗り替えが行われつつある。特に「韻律語」という韻律単位は“今にあつて昔にない”体系記述の枠組みであり、多良間方言や池間方言ではその有効性が示されているが、今後さらに地理的に広い範囲で設定可能な見通しがたっている(松森晶子 2015)。これによって今後、共通の枠組みでの体系間比較が可能であると考えられる。

本発表では、この「韻律語」を分析上の基本的な韻律単位にすえて、宮古諸島の三つの方言について動的音韻解釈を行い、それらに通底する共通性を見ようとするものである。

動的音韻解釈の「動的」とは、H,L等の音調の相対的な高さの配置をみる静的な捉え方ではなく、上昇、下降、高さの持続など、時間経過に沿う音調変動に注目した見方である。東京方言他の本土方言においては、こうした動的な見方は、アクセントの「非段階観」ないしは「方向観」として記述に用いられてきたが(川上蓁 1957, 上野善道 2019)、この研究では宮古諸島の諸方言にもその方法を採用するのである。

以下、音調変動の動的な見方に立って、各方言でどのような韻律特徴が弁別的な特徴かを考える。なお、発表者は、以下の(i)~(iii)の仮説をもとに論を進める。(i)「韻律語」には弁別的な特徴を具えている有核の韻律語とそれを欠いている無核の韻律語があり、それらが音韻的な対立をなしている。アクセント核は韻律語全体の音調の動きを示し、韻律語内の変動の位置の違いは音韻的には対立しない。(ii)「韻律語」には「主韻律語」と「副韻律語」の2種がある。「主韻律語」は固有の型をもっている「韻律語」(主に内容語)であり、「副韻律語」は固有の型をもっていない韻律語(助詞類、複合語後部要素など)である。(iii)宮古諸方言のアクセント体系は「三型体系」で、有核韻律語と無核韻律語の組み合わせによって表すことができる。a, b, cの型から成る「三型体系」は、方言間で表層の音調と核の弁別特徴の違いはあるものの、a型: (... $\mu$ ) (... $\mu$ )、b型: (... $\mu$ ) (... $\mu$ )\*、c型: (... $\mu$ )\* (... $\mu$ )に集約できる。

なお、a, b, cは、韻律語が並ぶ「音調パターン」(すなわち「型」)を表すときに用い、A, B, Cは「型」の所属を示す「語彙グループ」の記号として用いる。「型」を決定するのは、最初の語根を含む韻律語であるので、aの型に所属すると想定される「語彙グループA」がa型の音調パターンで現れた場合は、当然、a: ( $\sqrt{A}$ ) ( )のように表される。しかし体系的な空き間やいわゆる“中和”によって、予想される「型」で現れない場合がある。この場合、例えば、a: ( $\sqrt{C}$ ) ( )や、a: ( $\sqrt{AC}$ ) ( )のように表す(後の与那覇方言参照)。前者はc型で現れると予想される語彙グループCがa型の音調パターンで現れた場合、後者はAグループとCグループが合流してa型の音調パターンで現れる場合を指す。

### 2. 池間方言

池間方言の例は、Igarashi et al. (2018) から引用する(ただし本発表に合わせて、型記号をABCからa型b型c型へ変更、また一部音韻表記を変更)。

池間方言では、3つ以上の韻律語が並んだとき、三型の対立が明確になる(1)。各型の対立は、Hを含

む韻律語の配置で表すこともできるが (2), 発表者は動的にみて, 弁別の特徴は「次の韻律語を上げる」という「上げ」にあると考え, 「上げ核」で解釈する。最初の韻律語の高まりは, いわゆる「句頭」のしるしで非弁別的な特徴である。a 型は韻律語が無核, b 型は 2 番目の韻律語 (副韻律語) に「上げ核」がある有核, c 型は 1 番目 (主韻律語) に「上げ核」がある有核である (3)。「上げ核」で解釈する利点として, 三型体系がすっきりした形に整理できるほか, 有核の韻律語が H の状態で文末に立ったとき, 文末の音調低下 (final lowering) が抑制されることを説明できる利点がある。ちなみに無核の韻律語が H の状態で文末に立ったときは音調低下が現れる。なお, 有核の韻律語が低い状態で文末に立ったときは, そのまま低く終わり, 無核の韻律語と対立は見えない。

### (1) 池間方言の例

Igarashi et al. (2018) の例	発表者の解釈
(1a) a 型: (<a.ka>) (<ma.mi>) (<gi.i>) ‘赤豆木=小豆の木’	( $\sqrt{A}$ aka) (mami) (gii)
(1b) b 型: (<ga.zi>) (<ha.na>) (<gi.i>) ‘鈎花木=ガジュマルの木’	( $\sqrt{B}$ gazi) (hana) (gii)
(1c) c 型: (<ju.i>) (<fa.u>) (<bu.si>) ‘夕食べる星=金星’	( $\sqrt{C}$ ju) (fau) (busi)
(2a) a 型: (<bu.tu>) (<ma.i>) (<mi.i.n>) ‘夫も見ない’	( $\sqrt{A}$ butu) (mai) ( $\sqrt{C}$ miin)
(2b) b 型: (<ma.ju>) (<ma.i>) (<mi.i.n>) ‘猫も見ない’	( $\sqrt{B}$ maju) (mai) ( $\sqrt{C}$ miin)
(2c) c 型: (<na.bi>) (<ma.i>) (<nja.a.n>) ‘鍋もない’	( $\sqrt{C}$ nabi) (mai) ( $\sqrt{C}$ njaan)
(3a) a 型: (<bu.tu.u>) (<mi.i>) (<u.i>) ‘夫を見ている’	( $\sqrt{A}$ butuu) ( $\sqrt{C}$ mii) (ui)
(3b) b 型: (<ma.ju.u>) (<mi.i>) (<u.i>) ‘猫を見ている’	( $\sqrt{B}$ majuu) ( $\sqrt{C}$ mii) (ui)
(3c) c 型: (<na.bju.u>) (<mi.i>) (<u.i>) ‘鍋を見ている’	( $\sqrt{C}$ nabjuu) ( $\sqrt{C}$ mii) (ui)

### (2) 池間方言のそれぞれの「型」

- a 型: (<H>) (<L>) (<L>) 1 番目を除いて H を含む韻律語はない  
 b 型: (<H>) (<L>) (<H>) 3 番目の韻律語が H フットを含む  
 c 型: (<H>) (<H>) (<L>) 2 番目の韻律語が H フットを含む

### (3) 池間方言のそれぞれの「型」 (上げ核) による

- a 型: (... $\mu$ ) (... $\mu$ ) 無核  
 b 型: (... $\mu$ ) (... $\mu$ ) 2 番目の韻律語に「上げ核」  
 c 型: (... $\mu$ ) (... $\mu$ ) 1 番目の韻律語に「上げ核」

## 3. 多良間方言

多良間方言の特徴は, 有核の韻律語が, 高く実現する環境と低く実現する環境で異なる振る舞いをするところにある。(4) は文頭で, 高く始まる環境に属するものである。(5) は文中で低く始まる環境に属するものである。

### (4) $\alpha$ : 文頭, 単純語=助詞, 複合語=助詞の例 (...miiraiL 《見える》が続いた例)

a 型	[kuba=mai... 《クバも...》 ( $\sqrt{A}$ kuba) (mai)...	[kuba+gii=mai... 《クバ木も...》 ( $\sqrt{A}$ kuba) (gii) (mai)...
b 型	[mami=ma]i... 《豆も...》 ( $\sqrt{B}$ mami) (mai $\checkmark$ )...	[mami+gi]i=mai... 《豆木も...》 ( $\sqrt{B}$ mami) (gii $\checkmark$ ) (mai)...



(10) 有核韻律語の実現形比較 (多良間方言と池間方言)

多良間方言	池間方言
$\beta : (... \mu^{\vee}) (... \mu)$	$(... \mu) \uparrow (... \mu)$
$(... L) [(H...)]$	$(... L) [(H...)]$
$\alpha : ([... \mu^{\vee}) (... \mu)$	$([... \mu] \uparrow [(... \mu)$
$... H] L) (L...)$	$... H) [(H...)$

おそらく、両方言の有核韻律語は、 $*(\mu\mu) \uparrow$ ,  $*(\mu\mu\mu) \uparrow$ ,  $*(\mu\mu\mu\mu) \uparrow$  の上げの特徴を有しており、池間では句頭の韻律語 (詳細には韻律語の始めから 1 フット分, Igarashi et al. 2018) が高くなったが、有核韻律語の「上げ」の特徴は維持された。一方、多良間では、 $\beta$  の環境 (文中) で「上げ核」を保存したが、 $\alpha$  の環境 (文頭) では、最後のモーラをのぞいて、前部分を高くする変化が起きた。 $(\mu\mu) \uparrow > (\mu) \mu$ ,  $(\mu\mu\mu) \uparrow > (\mu\mu) \mu$ ,  $(\mu\mu\mu\mu) \uparrow > (\mu\mu\mu) \mu$ 。この一種の“語頭隆起”にともなって  $\alpha$  の環境の「上げ核」は消滅した。多良間方言では文頭の音調型を代表的・典型的なものと考えがちだが、むしろ  $\beta$  の環境の実現形が歴史的にも古いと推定される。

#### 4. 与那覇方言

与那覇方言は「三型体系」を有しながらも限定した条件のもとでしか明確な 3 つの対立は現れない。以下の (11) をみると、3 モーラ前部要素の複合語で 3 型の対立が見られる。2 モーラ前部要素の複合語では、A, B, C の語彙グループは b 型で現れ、対立しない。しかしそれぞれの名詞に連体格助詞 *nu* を付けた形、c: **[waanu] M<sub>cu</sub>**。《豚の味噌》, a: **gumanu M<sub>cu</sub>**。《胡麻の味噌》, b: **mugi[nu M]cu**。《麦の味噌》では、対立が現れる (「。」は言い切りの記号)。これらは、3 モーラ前部要素複合語の **[zimami] M<sub>cu</sub>**, **kacjuu M<sub>cu</sub>**, **av[va M]cu**。と同じになる。

3 要素連続の複合語では、**kuba gii jama [meedu]...** 韻律語表記 ( $\sqrt{A}$ kuba) (gii) (jama) (**[meedu]**)... 《クバ木山も》, **ma[mi gii] jama meedu...** 韻律語表記 ( $\sqrt{B}$ mami) (gi[i] (jama) (meedu)... 《豆木山も》) のように現れる。a 型の場合、文節末の韻律語は必ず H になることから、非弁別的な文節末の区切りの機能をもつ、一種のプロミネンスとして高い韻律語が現れたとすべきかもしれない。また、( $\sqrt{A}$ kacjuu) (**[meedu]**) (aa)。を一応、b 型としたが、これも文節末の区切りの音調が現れたものかもしれない。ここでは、ひとまずこれらの文節末 H の韻律語も有核としておく。

以下の (12), (13) は対立の在り方をまとめたものである。部分的に 1 つの型しかなく対立がないもの (「2 モーラ名詞単独」, 「2 モーラ名詞も(ぞ)ある」など), 2 つの型しかないもの (「3 モーラ名詞単独」, 「2 モーラ名詞前部要素複合語」など) が観察される。

発表者は、この方言では、「昇り核」のある有核韻律語  $\wedge (... \mu)$  と無核の韻律語  $(... \mu)$  の組み合わせで解釈できると考える (14)。この「昇り核」は、核にマークされた韻律語の最初から高く発せられ、韻律語の終わりまで高い。また昇り核のある韻律語が 3 モーラに満たない場合は、前の韻律語から早めに昇っていく (**mu[gi M<sub>cu</sub>] meedu aa**, **av[va M<sub>cu</sub>] meedu aa**。) また有核の韻律語は、言い切りのとき文末低下が起きる。その際は 3 モーラ分の H ではなく、2 モーラの H が現れる (**[zima]mi**, **mu[gi M]cu**, **av[va M]cu**。)

(11) 与那覇方言の体系

単独。	～もぞある。	～味噌。	～味噌も（ぞ）ある。
C: waa。	waa [mee du] uu。	waa Mcu。	waa Mcu [meedu] aa。
A: guma。	guma [meedu] aa。	guma Mcu。	guma Mcu [meedu] aa。
B: mugi。	mugi [meedu] aa。	mu[gi M]cu。	mu[gi Mcu] meedu aa。
C: [zima]mi。	[zimami] meedu aa。	[zimami] Mcu。	[zimami] Mcu meedu aa。
A: kacjuu。	kacjuu [meedu] aa。	kacjuu Mcu。	kacjuu Mcu [meedu] aa。
B: avva。	avva [meedu] aa。	av[va M]cu。	av[va Mcu] meedu aa。

語彙:  $\sqrt{C}$ waa「豚」,  $\sqrt{A}$ guma「胡麻」,  $\sqrt{B}$ mugi「麦」,  $\sqrt{C}$ zimami「落花生」, kacjuu「鰹」,  $\sqrt{B}$ avva「脂」,  $\sqrt{B}$ Mcu「味噌」, mee「も」, du焦点助詞, aa「ある」, uu「居る」

(12) 2モーラ韻律語

a: ( $\sqrt{C}$ waa)。	b: ( $\sqrt{C}$ waa) ^ (meedu) (uu)。	a: ( $\sqrt{C}$ waa) (Mcu)。	a: ( $\sqrt{C}$ waa) (Mcu) ^ (meedu) (aa)。
a: ( $\sqrt{A}$ guma)。	b: ( $\sqrt{A}$ guma) ^ (meedu) (aa)。	a: ( $\sqrt{A}$ guma) (Mcu)。	a: ( $\sqrt{A}$ guma) (Mcu) ^ (meedu) (aa)。
a: ( $\sqrt{B}$ mugi)。	b: ( $\sqrt{B}$ mugi) ^ (meedu) (aa)。	b: ( $\sqrt{B}$ mugi) ^ (Mcu)。	b: ( $\sqrt{B}$ mugi) ^ (Mcu) (meedu) (aa)。

(13) 3モーラ韻律語

c: ^ ( $\sqrt{C}$ zimami)。	c: ^ ( $\sqrt{C}$ zimami) (meedu)...	c: ^ ( $\sqrt{C}$ zimami) (Mcu)。	c: ^ ( $\sqrt{C}$ zimami) (Mcu) (meedu)...
a: ( $\sqrt{A}$ kacjuu)。	b: ( $\sqrt{A}$ kacjuu) ^ (meedu)...	a: ( $\sqrt{A}$ kacjuu) (Mcu)。	a: ( $\sqrt{A}$ kacjuu) (Mcu) ^ (meedu)...
a: ( $\sqrt{B}$ avva)。	b: ( $\sqrt{B}$ avva) ^ (meedu)...	b: ( $\sqrt{B}$ avva) ^ (Mcu)。	b: ( $\sqrt{B}$ avva) ^ (Mcu) (meedu)...

(14) 与那覇方言のそれぞれの「型」

- a型: (...μ) (...μ) 主韻律語が無核, 次が副韻律語の場合はそれも無核。  
 b型: (...μ) ^ (...μ) 主韻律語が無核, 次に続く副韻律語が有核。  
 c型: ^ (...μ) (...μ) 主韻律語が有核, 次が副韻律語の場合は無核。

「昇り核」の設定が正しいとすると, 与那覇方言も池間方言, 多良間方言同様, a型: (...μ), b型: (...μ) (...μ)\*, c型: (...μ)\* に集約できる。

さて, (11) (12)をみると, 句頭で2モーラの有核韻律語 ^ (μμ) を欠いていることがわかる。この2モーラ有核韻律語の欠如がこの方言の大きな特徴で, 多くの環境での“中和”が進んだ要因になっている。素直に考えるならば, 有核韻律語の無核化 ( \* ^ (μμ) > (μμ) ) によるものとも考えることもできる。この考えによれば, 句頭の2モーラ有核韻律語 ^ (μμ) は, 言い切り形 \* [μ]μ。接続形 \* [μμ]...と想定され, この形から無核に変化した。しかしながら, これらが一気に消失し, 無核韻律語への変化 (言い切り形 \* [μ]μ。 > μμ。接続形 \* [μμ]... > μμ..) を遂げた理由を説明するのは容易でない。

発表者は, 2モーラ有核韻律語の欠如は, 相当に古い段階で起きたと想定している。すなわち与那覇方言の有核韻律語は, (15)で示すように, かつての池間方言, 多良間方言のように「上げ核」をもっていたと仮定しよう。

(15) 与那覇の有核韻律語の古い祖形

\*(LL)J, \*(LLL)J, \*(LLLL)J

この状態のときに、言い切り形の場合は、Lが3モーラ以上連続するところで、最後のLを残してそれより前のLがHになる変化が起きた(16)。これは、南北朝時代に京阪アクセントで起きた低起式が高起式に変化した、いわゆる「体系変化」と類似の変化である。

#### (16) 与那覇の有核韻律語の変化

\* $(LL)$ ] >  $(LL)$  変化なし, \* $(LLL)$ ] >  $^{\wedge}(HHL)$ , \* $(LLLL)$ ] >  $^{\wedge}(HHHL)$

韻律語の前部がHになった変化にともない、弁別特徴は「上げ核」の「上げ」から「昇り核」の「昇り」に変化した。なお、Lが3モーラ以上連続するところに起きたHへの変化の条件は、おそらくこのワークショップで議論される五十嵐、松森両講師の「フット構造」に関係する。また、句頭の明示という機能をもっていた可能性もある。こうした句頭の隆起が2モーラで起きなかったことが、のちの与那覇のアクセント体系の形成に関わったと考えられる。ちなみに無核の系列は、\* $(MM)$ , \* $(MMM)$ , \* $(MMMM)$ の平板の音調型を想定しているが、実質的な音調変化のなかった元有核韻律語(LL)は、上げの特徴を失ったあと、無核に合流するのにあまり時間はかからなかったと想定される。

### 5. おわりに

本発表では、池間、多良間、与那覇の三方言の「三型アクセント体系」を取り上げ、そこに見られる共通の枠組みを示した。また、各方言の「上げ」の特徴の重要性を指摘した。これらの3方言では、有核韻律語と無核韻律語ですべてが処理できるように扱ったが、実際のところ、その枠には収まらない可能性がある方言もある。例えば、旧下地町上地方言では、b型は1番の韻律語の末まで高く、c型は1番の韻律語の途中で下降が現れて対立する。すなわち、最初の韻律語内部の下降の位置の違いが弁別に効いてくると思われる例がある。この場合も前の韻律語を高くする「降り核」を、b型の2番目の韻律語の頭に、c型は1番目に想定することもできるが、妥当性についてさらに検討が必要である。全ては今後の課題とする。

#### 【参考文献】

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ベラルー トマ・久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(2), 134-138. / 上野善道 (2019) 「人間の言語能力と言語多様性」 嶋田珠巳・斎藤兆史・大津由紀雄編『言語接触—英語化する日本から考える「言語とはなにか」—』65-96, 東京大学出版会. / 川上泰 (1957) 『国語アクセント法』学書房. / 新田哲夫 (2022) 「南琉球池間方言アクセントの動的音韻解」音韻論フェスタ 2022, オンライン 2022年3月7日. / 新田哲夫 (2023) 「南琉球多良間方言アクセントの弁別特徴」『金沢大学歴史言語文化系論集 言語・文学篇』18, 1-20. / 新田哲夫 (2023) 「南琉球宮古島与那覇方言のアクセント体系と弁別特徴」『日本方言研究会第116回研究発表会発表原稿集』57-64. / 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院. / 松森晶子 (2013a) 「宮古島与那覇方言のアクセント交替」『日本女子大学紀要 文学部』62, 1-21. / 松森晶子 (2013b) 「宮古島における3型アクセント体系の発見」『国立国語研究所論集』6, 67-92. / 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系—その韻律単位に関する考察」『日本女子大学紀要 文学部』64, 55-92. / Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi & Tomoyuki Kubo (2018) “Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan,” Kubozono, Haruo & Griko, Mikio (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, De Gruyter Mouton, 83-128.

付記: この研究は、JSPS 科学研究費補助金、課題番号 20H01259 「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」によってなされた。